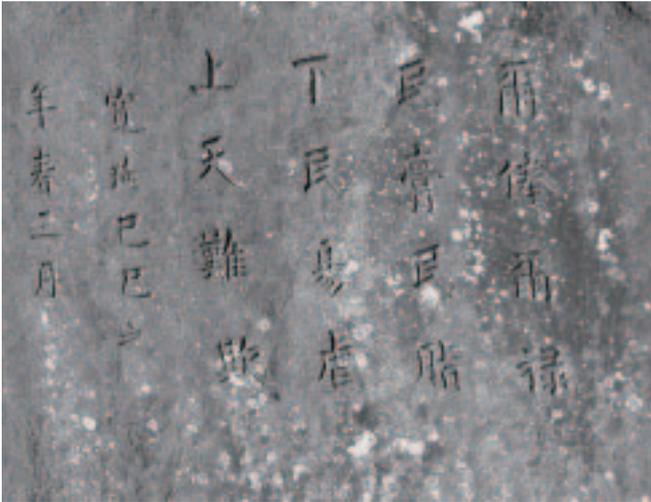


# 二本松藩戒石銘刻銘260年記念式典



11月14日、旧二本松藩五代藩主・丹羽高寛公が藩の儒学者・岩井田昨非の進言を受け刻ませた国史跡・旧二本松藩戒石銘碑が完成してから260年の節目にあたるため、戒石銘「継承」と普及を目的とした記念式典を男女共生センターで開催しました。

二本松吟詠会による献吟、戒石銘顕彰作文(中学2年対象)とエッセイ(一般対象)両コンクールの最優秀賞等の表彰および作文の発表、市文化財保護審議委員の相原秀郎さんによる特別講演が行われ、現代でも教育や行政の規範として通じる戒石銘の教えを再認識しました。

戒石銘顕彰に関する作文およびエッセイ両コンクールの最優秀作品をご紹介します。(敬称略)

## 作文コンクール最優秀作品

### 「戒石銘が語りかけてくれること」

二本松第三中学校二年

高島 誠生



霞ヶ城を訪れる人々を迎える五メートルの花崗岩の大岩。そこに刻まれた四句十六字の教えである戒石銘。こ二本松に二百六十年もの間、伝えられ息づいてきた戒めであり、二本松の精神の象徴であると言えるだろう。

この戒石銘は、二本松市民の僕にとっても馴染み深いものである。というのも小学生の時、よく戒石銘碑周辺の落ち葉掃きなどの清掃活動に参加していたからである。「爾の俸 爾の禄は 民の膏 民の脂なり 下民は虐げ易きも 上天は欺き難し」僕は、この文章の読みの響きをとても気に入っている。戒石銘の意味を知ってからというものは、この碑文に漂う清らかさや誠の心の美しさを感じ、ますます素晴らしい教えだなあと感じるようになった。

「戒石銘に学ぶ」の資料によると、その起源は千年以上前の中国にあると書いてあった。戒石銘の原型が、はるか千年以上も昔の時代に形作られていたなんて。そして今、それほどの年月を経てもなお、この僕達の住むふるさと二本松に受け継がれているなんて。僕は驚きと同時に、うれしさと、誇らしさの入りまじったなんともいえない気持ちに包まれている。

二本松藩に戒石銘がつけられた当時は、江戸時代の士農工商という身分制度の厳しい時代であった。武士こそが絶対的権力者だったにもかかわらず、農民あつての武士、だからこそ下々の民達を欺いてはいけないという民を思う心を忘れなかった二本松藩の教えは本当に素晴らしいと思う。

しかし、この戒石銘の教えを岩井田昨非に反対する人々が、昨非を陥れるため、「下民は欺きやすい。虐げて脂をしぼれ。そして汝らの禄とせよ。」と教え込み、農民の一揆を煽動したことは、非常に残念で悲しい出来事であつたと思う。

この戒石銘の教えを、今、僕は、日常生活の中にどう生かしていったらよいのだろう。自分にあてはめて、この戒石銘の教えをあらためて見つめてみると、僕は「爾の俸 爾の禄」という言葉が「自分の行いの結果や成果」と思えるようになってきた。「民の膏 民の脂なり」という言葉は「自分の努力の汗の結果」と読み替えることができる。そして「怠けることはたやすいが、努力をしたかどうか、自分自身の心を欺くことはできない」と読み替えることができる。自分の行動を見ている自分自身の心は、すべてを知っているのだ。

僕は今、勉強、部活、そして友人関係など、様々なことを背負いながら学校生活を送っている。本当に毎日が忙しく慌ただしい日々の連続だ。そこには、時々、その忙しさをゆえにちょっとしたことを面倒がり、適当に物事をすまし、かたをつけようとしてしまう自分がいる。これは、戒石銘の教えとはかけ離れた姿ではないだろうか。まして僕は、中学二年生という中堅学年である。こんな時こそ、戒石銘の教えを思つて行動していきたいものだ。人を欺くことなく、自分を欺くことなく、自分に正直に誠実に努力を積み上げていかなければならないと思う。戒石銘は、そんなことを僕に語りかけてくれるのだ。

祖母がよく僕に言っていた言葉を思い出す。「誠生、いいか。お天道様が見ている。神様が見ている。仏様が見ている。そして一番に自分が見ているんだよ。」

僕は、戒石銘の教えと祖母の言葉が重なって、僕の進む道を照らし出しているように感じている。これからも戒石銘の精神を胸に、進んでいきたいと思う。

エッセイコンクール最優秀作品

今の時代にこそ「戒石銘」

渡邊 三子(松岡)

《春しぐれ城は石垣より濡れて》

私にとつてのお城山はいつでも気軽に往くことができ、心身が癒される場所である。花も、芽吹きも、万緑も、紅葉も、春夏秋冬どの季節もいい。晴れの日も雨の日もいい。しみじみとしたゆたかさを感じさせる最高のスポットである。私が二本松に転居したのは昭和四十年、お城山とはそれ以来の付き合いである。訪ねることになにかしら魅力を感じさせてくれる。有り難いお城山である。

《城巡る水音唳々淑気かな》

お城山の本丸跡に立つと、思わず大きく深呼吸したくなる。大気の澄みを感じるのには私だけだろうか。おおよげさのようだが、城山全体が特別のオーラを発しているようにさえ思えてくる。それは、本丸や箕輪門、搦手門などの門跡や石垣、樹木の佇まい、二合田用水の流れや滝の音、るり池や霞ヶ池の輝き、それら城山絵巻全体から感じ取れるものとはばかりも思われない。それはもしかしたら、永々脈々と築かれてきたこの城の歴史の持つ重厚感なのかも知れない。しみじみと感じる温かな重みだ。新年の城に立ち、二合田用水の水音を聞いているとなおさらのことである。

《木洩れ日の揺れいる井戸や濃紫陽花》

菊人形展の時期、展示場を見終わった方と話したことがあった。菊人形の感想や紅葉の美しさは讚えたが、お城山そのものの感想はあまり聞けなかった。箕輪門の佇まいや本丸跡に立った景観、まして国指定の史跡ともなった「旧二本松藩戒石銘碑」のことなどはこの日の見学にはなかったようで、まことに残念と思い、案内してあ

げて喜ばれたことがあった。

《日うらうら霞ヶ池の水平ら》

実際、私も二本松に来てしばらくはお城山の池周辺や洗心亭、智恵子抄詩碑など散策しては満足な気分であった。あつて城跡東手の石の存在などまったく目にしていなかった。あの頃、この「四句十六字」の拓本が額入りで壁面に張られているのをあちこちで目にしてはいたが、あの戒石銘とは繋がっていない。二本松のシンボルとしてのお城山のすべて知った積もりでいたのに、まさにそれら基盤ともいえる「戒石銘」への関心が薄かったことは大きな反省である。その十六文字の読みや意味、碑のこれまで歴史の経過をしっかりと確認出来たのは、市内に務めるようになってからである。勿論今はしっかりと読み下せる。

《方緑や四句十六字の教え》

もともと漢詩に興味もあつたので、お城山の戒石銘の存在をしっかりと意識してからは、まさに目から鱗。藩士への戒めを、二百六十年も前にこのように単刀直入、極めてあからさまに堂々と刻み、藩士に朝な夕な示した事実、これはものすごい事である。時代を越え驚愕さえ覚える。上に立つもののその指揮力と姿勢は誠に偉大、尊敬のなにもでもない。「ははっ」と有り難く受け、言葉を噛み締めざるを得まい。まさに先人の偉業である。

《風強き枝先にこそ冬桜》

私たちは驚異の高度成長期を経、物質的豊かさがある程度手に入れたはしたが、その過程で失ったものも多い。ようやく気づいた時は、これまで私たちを支えてきたはずのさまざまな規範さえ、社会的システムさえ、その変容を迫られている。毎日のように起こる事件も目に余る。それら事件の基層はなんなのか。「いつ、どこで、だれが、なぜ、なにを、どのようにしたのか」を知らなければその真意はとらえ難いが、直面する課題解決の糸口は、歴史認識を踏まえた時代の洞察にこそあると、この頃特に

強く感じている。

《岩ばしる水のしづきや若葉光》

「戒石銘」の原典は、中国後蜀の君主孟昶の「二十四句九十六字」の「戒諭辞」であり、後の君主太宗がそこから「四句十六字」を抜き出したのが「戒石銘」という。日本の平安時代中頃のこと。さて、霞ヶ池は、江戸時代(一六四三)から明治(一八六八)まで二百一十五年間二本松藩丹羽氏の居城。その城の東手、藩士たちの通用門にあつた自然石に当時(一七四九)藩の方針によりこの「戒石銘」四句十六字を刻んだという。藩政改革、財政改革、綱紀肅正等実現のために具体的にかかわつた方々の思い、さらに農民や反対派の人々との複雑な絡みあいなどを考えると、その成り立ちまでの歴史的背景は、知れば知るほどに想像を絶するものがあつたようだ。

今盛んにマニフェストなる言葉が大義名分のごとくかざされているが、いまこそ先人の歩みを確かめ永遠不滅の「戒石銘」が必要の時。それは行政に携わる者の姿勢の原点であり、その率先垂範こそが市民の平和な日々の実現に繋がると確信したい。お城山一帯の清澄な大気をずっと信じて見守りたい私である。

お城山での元朝の二句。

《日の出待つ一心一念大旦》

《肅々と全肯定の初日かな》

その他の入賞者

作文コンクール優秀賞

- ・及川 夏実(二本松三中)
- ・渡邊 博美(岩代中)
- ・紺野 智香(東和中)

作文コンクール入選

- ・安齋 純花(二本松一中)
- ・菅野菜津美(二本松二中)
- ・三菅 唯(二本松三中)
- ・遊佐 涼太(二本松三中)
- ・阿部佳菜子(安達中)
- ・齋藤 遥(安達中)
- ・和田 恵(小浜中)

エッセイコンクール優秀賞

- ・渡邊 晋作(茶園)
- ・氏家 芳男(智恵子の森)